

第一部

第一章 K旅館

雪深い山間にあるK旅館。そこは年配の湯治客を対象とした地味で小さな旅館だったが、この頃では若い女性がひとりでここを訪れることも珍しくない。

K旅館では美しい女マッサージ師が特別な治療をしてくれるらしい。

そんな不確かな噂を聞きつけた女たちが、噂の真相を確かめようと、興味本位で、あるいは切実な願いを抱いて、ひとり、またひとりとこの古びた湯治場にやって来るのだ。

由貴もそんな女のひとりだった。彼女は列車を降り、小雪の舞う寒々としたホームにおり立った。すぐ前に無人の改札口があり、その向こうはすぐに山と

いった風景。こんなところに自分の願いを叶わしてくれる宿などあるのだろうか。

由貴はうら寂しい気持ちになりながらも、バス停わきでポツンと客待ちをしている一台のタクシーの窓を叩いた。

「お客さん、K旅館に行くんでしょう？」

五十過ぎほどの運転手はそう言うのと由貴を乗せ、行き先も聞かぬ間にどんな車を加速させた。

「そうですけど、どうしてK旅館だってわかるんですか？」

「この辺で若い女性が行くっていったら、K旅館しかないからねえ」

含みのある笑い。由貴は魂胆を知られているような気がして思わず顔が赤くなった。

「あその温泉って、冷え性に効くんだってね。俺はそんなに効いたような気はしなかったけど、でもまあ、俺は冷え性じゃねえからなあ、効きようもないか」

男はそう言うと、振り向きざまに声を出して笑った。彼は噂のことは知らないらしい。

「お客さんも冷え性なのかい？」

「はい、ちよつと……」

「若い女の人ね、特に大事にしたほうがいいよ。見栄を張るのもいいけど、年をとってからあちこち出てくるんだから」

「はい」

「今日でもうふたり目だなあ。おたく位の年の女の人を乗せたのは。」

東京から来たっていう髪の毛の長い人だったけど、連れの人かい？」

「いいえ。わたしはひとりです」

「やっぱりそうかい。みんな、どういうわけかひとりなんだよね。不思議だなあ。隣町のほうがずっと勧めやすいホテルがあるんだけど」

「K旅館のお湯はすごくいいと聞いてますから」

「まあ、このごろは秘湯ブームとやらで鄙びた温泉なんか若い人にも受けるみたいだから、いいんだけどさ。でもね、おたく、もしかして自殺なんて考えてない……よね？」

「とんでもない。そんなことないですよ」

「ごめん、ごめん、一応聞いてみただけさ。昔は若い女の人なんて誰も来ないところだったからさ。悪く思わないでくださいね」

K旅館は山間の林道のような道を二十分ほど走った小さな岩場のようなところにあった。まわりが山に囲まれているなかでその辺りだけがまるで賽の河原のような殺伐とした雰囲気で、温泉というよりも、そこは霊場のような一種独特の空気までも感じさせる。溶岩のような大小の岩の裂け目から立ち昇る白い蒸気。源泉は高温で、湯量も相当豊富らしい。

K旅館の建物は旅館というより炭坑の倉庫や人夫の宿泊所を思わせる簡素で素っ気ない作りをしていた。それでも玄関だけは歓迎ムードを守り立てようとしているのか、そこだけ場違いなピンクのモールが派手に幾重にも飾られている。特別な理由がなければ若い女がこんな旅館を選ぶことなど、まずあり得ないことだろう。

「お客さんだよ」

運転手は玄関の引き戸を開け大声で怒鳴った。少しして遠くから「はい」

という返事がこだまのように聞こえてくる。

「帰りも呼んでよ。山田タクシーってフロントに言えばわかるから」

「わかりました」

「それじゃ、ゆっくり温まってきてね」

男が帰っていくのと入れ替わりに、年配の女中が急ぎ足であらわれた。白い割烹着姿。少し漬物のような臭いがする。

「さあさあ、上がってください。寒かったでしょう」

「佐川由貴といいます」

「ご予約は承っておりますよ。どうぞ、どうぞ、遠くから、ようこそいらっしやいました」

湯治の温泉宿らしく、廊下ですれ違う客は相当にくたびれた高齢者ばかりだった。常連客が多いのだろう。皆、裸のような格好で回りを気にせず歩いている。

階段を二階に上がった突き当たりの部屋が由貴の案内された部屋だった。八畳ほどの和室。赤い十四型のテレビのある、ごくありふれた安旅館の部屋の風景。

女中はお茶を入れてから、ここの温泉の効能や由来、それに食事の時間や土地の名産品のことまで詳しく説明してくれた。しかし、肝心のマッサージのことについては触れようとしないうちに、結局話は紋切り型のまま終ってしまう。山菜鍋のことなどどうでもいい。大事なことを聞きたかった。だが、下心のある彼女にとってそれを聞くのはやはり恥ずかしいことだった。山田タクシーの運

転手のあのニヤけた意味深長な顔を思い出す。実は彼はすべてを知っていたんじゃないだろうか。そしてそれはもちろんこの女中も……。

「それでは、ごゆっくりお休みください」

「あの……」由貴は真顔のまま口ごもった。

小首を傾げ、彼女は由貴の言葉を待った。

「あの……、凝りがひどいんですけど、マッサージなんかは……頼めるのでし
ようか？」

語尾はほとんど聞き取ることができなかった。しかし女中はすぐに「ああ……
…」と思い出したようにひとり呟き、そして

「お客さんも、北川のご指名ですか？」とわざと確かめるような口調で言った。

「えっ、北川？」

「いえ、ただ、この頃若いお客様で北川をご指名なさるかたが多いものですか……。凝りがひどいのでしたら、他にも腕のいいマッサージ師がおりますが」

「北川さんって、女性のかたですか？」

「そうです」

「若い？」

女中は少し笑って「そうです」と答えた。

「あの……わたしも北川さんを指名させてもらっていいですか？」

「時間のお約束はできませんが……」

「それでも結構です」

ここで引いてはK旅館に來た甲斐がない。由貴は恥ずかしさなど忘れたまま、

きっぱりそう答えていた。

第二章 湯 船

由貴は夕食を済ませてから、今日で二度目の湯に浸かっていた。一度目は老女の団体にかち合ってしまったのんびり湯船に入ることもできなかったが、今回は客の数も少なく、聞こえる音といったらお湯の流れる音ぐらい。

彼女は奥まった岩のくぼみに居場所を見つけ、肩まで湯に浸かりながら辺りをぼんやり見つめていた。不思議なドームに覆われた、屋外との境さえ曖昧な半地下の大浴場。自然の地形を利用したその荒々しくもおぼろな景色は神秘的

で、彼女はこうしているだけで、過ぎ行く時間も都会のわずらわしい喧騒も、自分がこの地を訪れた当初の目的すらも忘れてしまう。

「あなたもひとりで来たの？」

濃い湯気で気づかなかったが、いつのまにか隣に若い女性が座っていた。年は由貴より少し上、たぶん、二十二歳ぐらいだろうか。

「そうです」 由貴は微笑みそう答えた。

「いい温泉ですよね」

「そうですね」

女は長い髪を巧みに頭の上で束ねていた。タクシートの運転手の言っていた女性とは彼女のことかも知れない。

「今日、ここに来たんですか」と彼女。

「そうです。山田タクシーに乗って」

「わたしも今日、山田タクシーに乗って来たのよ。奇遇ね。わたし、小夏っていうの。坂下小夏。よろしくね」

やはり彼女が運転手の言っていた女性らしい。彼女は続けて言った。

「あなたも北川さん目当てで来たの？」

単刀直入に聞かれてドキリとする。北川という人物が由貴の目当ての人なのかそれはまだわからないが、たぶん間違いはないだろう。

「小夏さん……も、そうなんですか？」

「そうじゃなければこんなとこまでわざわざ来るわけじゃないじゃない」

「そうですよね……」

うつむく由貴に小夏は右手を伸ばしてきた。最初はウエスト、そしてその手は

徐々に上へとあがってくる。由貴はあまりにも唐突で声を上げることができなかった。

「だったら、同じ趣味ってことじゃない。違う？」

そう言いながらいたずらっぽく微笑む彼女。乳白色の湯のせいで肩から下は見えないが、彼女の右手はかなり大胆に由貴の乳房を揉んでいる。

「……あつ、やめて、ください……」

「ねえ、乳首立ってるわよ。かわいい顔してけっこうエッチね」

「そんな……」

「どうだった、北川さんのテクニック？」

「わたし、はじめてなんです……。あんっ……」

「はじめての人には何もしてくれないのよ。知らなかった？」

「えっ……？　そうなんですか？　あっ、あっ……」

「でも、秘密の暗号があるの。知りたい？」

「……教えて下さい」

「だったら、わたしのおまんこ、触ってくださいって言うてみて」

「……そんな、イヤです」

「じゃあ、せっかく来たけど、何も起らないでしょうね。さようなら」

「あの……。待ってください」

「言えるの？」

「はい……」

「水の音で聞こえない」

「……わたしのおまんこ、触ってください」

「仕方ないわね、じゃあ、足、もっと広げて」

「えっ？ほんとに触るんですか？」

「どうせ誰にも見えないわよ。湯気とこのお湯だもん」

「でも……」

小夏の右手が乳房から下のほうへゆっくりと降りていく。老婆がひとり、――
mほど左前方に寄ってくる。

「おや、若い子なんて珍しいわね。学校のお友達？」

「はい。たまにこういう温泉もいいな、なんて。ね」

「う、うん……」

小夏の人差し指が茂みのあたりをさぐっていた。まっ白いお湯の中、由貴はあぐらをかくような格好で下半身を悶えるように揺らしている。

「ここは昔ね、近くの鉱山の人夫たちで賑わっていたのよ。わたしがおたく達ぐらいの年代かしら」

「そうですか。昔は何が採れたんですか？」

手前で円を描いていた指先がとうとう柔らかな粘膜の端をとらえた。じんわりと左右に割られる肉の花びら。お湯のぬめりと体の奥から湧きだすぬめりでそこはすでに溶けたチーズのようになっている。

「金が採れたのよ。鉱山はとっくの昔に閉じられてしまったけどね」

「ねえ、聞いた？ 金だって、金！」

指がバアギナを裂くように往復した。老婆が由貴の返事を聞こうと注目している。しかし、口から出たのは押し殺した嗚咽のような喘ぎだった。

「あっ……うう……。うっ……。ぐぐ……。っ！」

「どうしたの、おたく、顔が真っ赤よ」

「お湯にのぼせたのかも知れませんが。どう？ 大丈夫？」

湯気に包まれ見えなかった数人の中年女性が声を聞いて何事かと寄ってくる。

小夏は介抱するように由貴の体と向かい合った。性器をまさぐる指先はさらにぴったり蜜着し、膣口を貫いた中指は激しくピストン運動を開始している。

「はうう！ あっ……ううっ、うっく……！」

「この子、引きつけ起こしてるんじゃないの、早く湯船から出さなきゃ駄目よ！」

がたいのいい中年女性はそう言って由貴の体を子供のように抱き上げた。すぐに洗い場に寝かせ、絞ったタオルで顔や身体を拭いてやる。本当の理由を知るよしもない彼女は手当てをするその手つきも真剣だ。

「すみません……」

しばらくして由貴はやっと呟いた。女の汁はそうとう股間を濡らしていたが、たち込める硫黄臭と濁ったお湯のせいで誰も気づいてはいないようだ。

「ここのお湯は熱くて濃いからね、初めての人はお湯にあたっちゃうことがあるのよ。大丈夫？ 誰か呼んできてあげようか？」

「もう大丈夫です。ご迷惑をおかけしました……」

「彼女もそう言っていることですし、あとはわたしが部屋まで連れて帰ります。危ないところを助けていただき、本当にありがとうございます」

ふたりの言葉を聞き、中年女性は二、三の優しい言葉をかけてから去っていった。心配そうに見守っていた人たちも、いつのまにか白い湯気の中に同化して誰も見えなくなっている。

「ひどいですよ。湯船の中であんなことするなんて」

脱衣所を出た由貴は非難がましい視線を小夏に向けた。

「旅の恥はかき捨てよ。あなただってそう思ってたんでしょ？」

当たっているだけに、何も返すことはできなかった。そんなことより、暗号。

北川と会うための秘密の暗号を聞かなければ。

「それで、どうすれば北川さんと、あの……」

「何の話？」

「だから、初めて北川さんのお相手になるときの、その合い言葉というか：

「…」

「ああ。小夏の紹介だって言えばいいわよ。でも、北川さんは面食いだからな
どうだろうなあ。あなた、お名前は？」

「由貴。佐川由貴です」

「冗談よ、由貴ちゃん。あなたみたいな子、北川さんの好みだから大丈夫」

安心する由貴に小夏はいたずらっぽく瞳で微笑んだ。

「それじゃ、わたしの部屋ここだから。また夜にでも会いましょう。さようなら」

第三章 北川 舞

フトンの上に浴衣姿で寝転んでいた由貴は五分おきに時計を見ていた。時刻は夜の十一時を過ぎている。北川はまだ来ない。

意味もなく髪に手をやり、鏡に顔を映しては再びふとんに上に寝転がる。落ち着こうと思っても落ち着くことなどできなかった。異性との経験もないままに同性に身を委ねようとしているのだ。それも、まだ見たこともない未知の女性に。

浮んでは消えるさまざまな思いを断ち切るように、見たくもないテレビのスイッチを入れもした。しかし、NHKの暗いニュースと一カ月も前に東京で放送された番組を今ごろ流す民放が一局しか入らない状況では、テレビの音など耳障りなだけだった。

テレビを消すと部屋は恐ろしいほどの静寂に包まれた。窓の外には無限の闇が果てもなくどこまでも続いている。ときおり宙を舞う小雪が窓ガラスをコツリ、コツリと叩いていた。こんな地の果てのような場所に、あの小夏さえも虜

にする女性が本当にいるのだろうか。焦点の合わぬ窓の外の闇をただじっと見つめていると、北川どころかさつき会ったばかりの小夏でさえ、なんだか夢か幻のように感じてしまう。

今日は彼女には会えないとあきらめかけていた由貴に女中が報せをよこしたのは一時間ほど前のことだった。すでにマッサージの営業は終了した時間だったが、どうやら今夜は北川の好意で特別時間を延長してくれたということらしい。小夏が口添えしてくれたのだろうか。そう思うとありがたいような、北川と小夏の綿密な関係を思っただ嫉妬を感じてしまうような、由貴はそんな複雑な気分さえ感じてしまう。どうしてだろう。まだ会ったことさえないのに、彼女はまだ見ぬ女性にほのかな恋心まで抱いている。

緩慢に進んでいく時間の中で彼女はフトンの上にあお向けに寝転がり、ため

息をついた。天井には茶色のシミがまるで水墨画のように広がっている。

北川さん、北川さん……。

由貴は彼女の名を心の中で反復しながら、まだ見ぬ美しい人を想像した。

無意識のうちに右手が下半身へ伸びていた。足を開き、まわりつく浴衣の裾をだけさせた。露わになる、太ももからつま先までの初々しく眩い素足。

浴衣を扇のようにはだけさせた全裸に近いその姿は、全裸にいるよりずっと淫らで、そしてどんなセクシーな下着でいるよりコケティッシュで蠱惑的だ。

『ここなんて、どうですか？』

空想の中で美しい女性が下腹部のなだらかな丘に手をやった。由貴は想像に従い右手を添わせ、ビクンと身を固くした。

（少し・凝ってるようです……）

『この辺は、どうですか？』

指先が黒い茂みをからめるように円を描く。自然と強く目を瞑り、唇をきつく噛み締めた。指がさらに下へとおりる。

『もっと足を開いてください』

(でも……)

『さあ、もっと開いて……』

由貴は膝を立てながら、その膝をゆっくりと左右に開いていった。大事な部分がすべて隠し立てなく見えてしまう卑猥な姿勢。まだ直接触れてもいないのに、そんな姿を人に見られていることを思うだけで、濡れた秘唇はどうしようもないほど淫らになり、若芽の勃起は激しくジンジンうずきはじめる。

『この部分がずいぶんと固そうですね。そうとう凝っているみたいですよ』

(……柔らかく、なりますか?)

『少し揉んでみましょうか。どうですか?』

(はい……。すごく、いいです……)

『ここは?』

クリトリスを擦る指の動きが激しくなる。由貴は腰を上下に動かしながら普段より強く若芽を摘んだ。指先から手のひらまで透明の粘液ですでにびっしょりと濡れていた。小夏に触れられた感触がまだ色濃く残っているせいか、自分の右手がまるで自分のもののようにには思えなかった。花びらを弄んではクリトリスを擦り続ける激しい手淫。その動きは佳境を越え、由貴を無視して勝手にクライマックスへ突入していく。

「ああっ……! イッチャう……!」

思わず甲高い声音を発していた。深夜の静寂の中でその鳴き声は予想以上に部屋に響いた。彼女は急に我にかえり、濡れた指を弾くように引き戻した。まさにそのときだった。

「遅くなってすいません。マッサージの北川です」

意外に近い声にさらに驚き、由貴は浴衣もはだけたまま飛び起きた。

彼女は部屋の入り口の引き戸に手をかけたまま、申し訳なさそうにこちらを見ていた。

まさか、すべてを見ていたというのだろうか。由貴は素知らぬ素振りを繕うこともできないまま、顔を赤らめうつむいた。

「廊下でごあいさつをしたのですが、お返事があったと思い、戸を開けてしまいました。申し訳ありません……」

「いえ、いいんです。わたしの方こそ、あの、ちょっと眠ってしまったみたいで……」

由貴は慌てながらもなんとかその場を取り繕い、浴衣の乱れを整えながら意味のない曖昧な笑顔を見せた。

「お客さん、おひとりですか？」

「ええ。学校も冬休みに入りましたし、たまにはひとり旅もいいかな、なんて」

彼女は極力平静を装いながら、自然な口調でそう答えた。しかし、うっすら紅をさした表情や汗ばんだ白い肌はどこから見ても事を及んだ直後の女のしつとりとした色気に満ち、愛液の甘い香りは、空気に湿り気を与えるほど部屋いっぱいにこもっていた。

北川は当然すべてを悟っていたようだった。だが無論、そんな態度はおくびにも出さなかった。彼女は少女に向かって頷き、この土地の魅力を短く伝え、窓の外に舞う雪に視線を移した。

「いつもこんなに降るんですか？」

「これでも例年より少ないぐらいのようですよ」

「北川……さんは、ずっとここに？」

彼女は何も答えなかった。しばらくの沈黙の後、彼女はそつと口を開いた。

「雪はすべての音を吸いとってくれるんです。粉雪のちらつくこんな夜もいいですが、新雪の降り積もったあとの満天の星空なんて、すごく素敵な景色なんです。だって、白い雪が星の色で染まるんですから」

「星の色で？」

「ええ、この辺りには人工の明かりがないからでしょうね。それは淡い赤だったり緑だったり、ほとんどは青白い炎のような色なんですけどね」

「わたしも見たいな」

「もっと冷え込んだ寒い夜に。時間があつたら何日かここにお泊りになるといいですよ。必ずそんな幻想的な景色に出会えますから」

由貴は彼女と話しながらいつしか北川の深い瞳に吸い込まれていく自分を感じた。

年はたぶん、二十歳代後半に少し入ったぐらいだろうか。白衣に身を包んだそのからだは由貴よりもやや背が高く、くびれたウエストや膝から下が露出した長い素足は完成された大人の色香を感じさせる。

確かに、小夏も憧れるのが当然なほどの、見惚れるほど美しい女性だった。

人里離れた山奥に咲く一輪のユリの花を思わすような、華麗でいながら自分を誇示することのない清らかな美しさ。彼女は自分が誰よりも美しいということとをまるで気づいてはいないような自然な微笑みを浮かべながら、瞳を潤ませる由貴の顔をどこまでも優しく見つめている。

「それでは、そろそろ始めましょうか？」

北川は畳に手をつき、フツンの横に身をずらすようにして移動した。

由貴はそんな彼女の言葉に必要なない動揺を感じながら頬を桃色に上気させた。

「あの……。マッサージって、はじめて受けるんですけど、どうすればいいんですか？」

「うつ伏せに寝ていただければ結構です」

言われたようにすぐにうつ伏せに体を伸ばした。すぐに北川の白い指が彼女の首の後に触れはじめた。

「こつてる場所があつたら、遠慮なくおっしゃって下さいね」

「……はい」

こつてる場所などどこにも存在しなかった。友達によく肩コリや冷え性の悩みを口にするが、由貴はそんな悩みの一部でさえ、いまだかつて一度も理解できなためしがないのだ。

マッサージのプロの北川にそんなことがわからないはずもなかった。彼女の指圧の力は弱く、その感覚は揉むというよりほとんど撫でているにより近い。

脚の間がすでに濡れている由貴にとって、凝ってもいない首筋に触れられるのは、すでに性感マッサージを受けてようなものだった。

耳の後ろから後れ毛を上にもたれてしまっただけで、思わずつま先をモジモジとよじってしまふ。

温泉で温まった体温が、体の奥から湧き立つ新たな匂いを徐々に蒸発させていた。本能を刺激する、切ないような甘い匂い。北川は指先を首筋から背筋のほうに向けながら、ますます身をよじる由貴に向かって仰向けに寝るように、とそっと囁くように呟いた。

「浴衣も脱いでくださいね。そのほうがマッサージしやすいですから」

やはりショートツぐらい身につけておいたほうがよかったろうか。由貴は今さらながら恥ずかしさに頬を染め、年上の美しい女性の瞳をじっと見つめた。

「あの、北川さん……」

「はい」

「さっき、見てました……？　その、わたしのこと……」

「あつ、はい……。少し……」

由貴は絶望的な気分になりながらも、決して悪い気持ちにはならなかった。目の焦点を定めることさえ苦労するこの体が、すでにどうにもならないことぐらい、自分が一番よく知っている。それに北川だって、この火照った体が何を求めているかということなど、とっくに見透かしていることだろう。そう思うと少しは気が楽になった。ただ、もし彼女が自分のことを気にいってくれなかったら、それだけが心配でならなくて、由貴はこちらを見つめる北川の瞳から、すぎるような視線をそらすことも出来なかった。

第四章 淫技

「すいません、浴衣の下は裸なんです……。それでも構いませんか？」

「いいですよ。体を締めつけるものなんて本当はないほうがいいんです。お湯に入った後は体も熱を含んでいますしね」

由貴は小さく返事を返し、そしてゆっくりと浴衣を脱いだ。全裸のまま仰向けに横たわるのはさすがに勇気が必要だった。同性が相手なのだから下心がなければそれほど恥ずかしがることもないのだろうが、欲望や魂胆をすべて見透かされている今となると、まるで事情は違ってくる。ある意味、異性に裸を見られるより恥ずかしかった。

やや幼児体型の白い体が小刻みに震えていた。そんな由貴の全裸の姿は、美

しくも、なぜか見てはいけないもののような淫らさがあった。彼女の幼げな肉体には、オナニーを覚えてばかりの女子中学生のような、そんな青い雰囲気があるのである。

「こっている場所があったら遠慮なくおっしゃってくださいね」

想像したのと同じセリフ。しかし、この状態で、こっている場所と言われても……。

「この辺はどうですか？」

考える隙もないまま、乳房に右手が触れていた。羽で撫でられるような微かな手つき。

「少し、こっているみたいですよ……」

そう答えるのがやっとだった。不安と期待でひどく胸が脈打った。北川はこ

の胸の鼓動を直にその手で感じていることだろう。そう思うと全身の毛細血管が熱を帯び、耳まで痒いほどに紅潮した。

少女を見つめる北川の表情はどこまでも優しくかった。それはまるで自分の妹を見つめるような、慈しむような視線だった。しかし、その瞳はまどろみの中に漂うようにうっとり潤み、形のいい唇からは微かな吐息が洩れていた。不意に感じる大人の香り。

えっ、北川さんも感じている……！

「もう少し、強く揉んでみましょうね」

彼女の両手が急に大胆に乳首の回りを動きはじめた。生き物のようにユサユサたわむ、Fカップの大きな乳房。声を抑えようと思っても、内部から湧き出す激情はいやでも喉の奥を突き上げる。

「うぐ…あっうぐ……。あつ、うつ、うつ……」

「相当こっているようですよ。これはしばらく揉まなければ治りそうもありません」

やっぱり、わたしが想像したのと同じだ。そう思って驚きながらも、まるで羽毛のような軽やかさと、麵をこねるかのような力強さを矛盾なく両立させた彼女の感情を込めたマッサージは、由貴の想像など超越するほど苛烈だった。

嗚咽のようなあえぎがこぼれ、からだは魚のように跳ねまわった。あまりの気持ち良さで涙が溢れる。しかし北川は手の動きを休めようとすることもないまま、

「失礼します」

と一言いうと、由貴の太ももの上でさっと馬乗りの格好となり、巧みに揺ら

す手の動きにさらなる技を加えはじめた。

由貴はほとんど上半身を拘束されたような格好のまま、あえぎのトーンを一段上げた。乳房に垂直に力が加わり、ただでさえ暴れるようにたわんでいた白くやわらかなふくらみはますます歪んでタプタプと恥ずかしい音をたてはじめる。それは北川の手のひらから溢れながらからだの線を逸脱し、まるでダンスを踊るがごとく前後左右に跳ねていた。本来の形がよく整ったおわん型の形状だけに、その歪んだ姿がいかにもいやらしく目に映った。これ以上わずかでも力を入れると、快感が痛みへと変わってしまう、そんな瀬戸際の絶妙さ。由貴は未だ感じたこともない快感を感じながら、まぶたの裏にさっとオーロラのようなピンクの帯が錯綜する刹那の瞬間を感じとった。噂に聞いたマッサージが、これほど恍惚的なものだったなんて……。

誰にも教えてなんてあげない。絶対、誰にも。

「柔らかくなってきましたよ」

「はい、あつ、あつ……！」

「でも、ここは固くなってきましたね」

手の下で、軟骨のように固さを極めるピンクの突起。幼なげな体の中で妙に艶妖に発達したその乳首は、生々しく、じつとりと湿った楕円形の乳輪は、いやにリアルでいやらしかった。しかし、今は恥ずかしいという、乙女の正統な感情さえ、とるに足らない些細な迷いに感じられた。突起の頂点から全身に向けて冷たいまでの痺れる快感が放射される。そして続く、少女の勃起をえぐり取ろうとでもするようなきつい愛撫。

「痛いですか？」

歯を食いしばって悶える由貴に、彼女は遠慮ぎみにそう聞いた。

「……痛いです」

「それでは止めましょうか」

「いえ、触ってもらわなければ痛いんです。何だか、すごく張っちゃって……」

「わかりました。では、少し方法を変えましょうね」

北川は長い髪をかき上げてから、その身を小さく身を屈めていった。何をされるのかもわからぬまま、少女の右の乳首は彼女の口の中へと吸い込まれる。

「あぁっ……!!」

敏感なピンクのグミは、唾液のまどろみをまとった瞬間、すぐに北川の嵐のような舌技に晒された。それはまるで、間隔のない素早い往復ビンタを受けて

いるような狂おしい刺激だった。誇張ではなく、ピチピチと音を発てながら乳首が跳ねる。その激しく繰り返される舌の動きはまるで精密機械のように正確で、なおかつ生身の人間らしいやさしいゆらぎも感じさせた。

由貴は本能におもむくままに叫ぶような甲高い声を上げることしかできなかった。

「こ、こっちも、こっちの乳首も凝ってるのぉ！」

やっと口から出た言葉は、そんな自ら求める破廉恥な言葉だった。押し出すように左の乳首が差し出された。北川はすぐに唇と舌とでそれに応えた。ヌルヌルとした粘膜の中で小さな突起が小魚のようにピチピチ跳ねる。右、左、右、左と交互に繰り返される吸引とビンタの眩い応酬。

「北川さんも脱いでください。ね、いいでしょう……?」

由貴はヌメリの中に包まれる恍惚感に酔いしれながら、すがるような表情で彼女の白衣に指をからめた。

彼女は微かに微笑みを浮べながら白衣のボタンを続けてはずした。さらりと肌をすべるように落ちる白衣。彼女是一片のシヨーツさえもその身にまといなかった。

「北川さん、きれい……」

由貴は感極まって細い腰を強く抱いた。そんなふたりの全裸の姿は、若さを誇示する肉体と、完成された大人の艶やかな肉体のまるで見本のようなだった。

「こっちのほうも、こってるんですよね」

彼女の手が由貴の茂みの下へと伸びていく。

「ああ……っ！」

「やっぱり、すぐくっついてますね。こんなになるまで放っておくなんて、体に毒ですよ」

「あつ、ああつ、北川さん……！」

由貴は仰向けのまま足を大きく開かされた。ねっとりとした淫らなピンクの唇が彼女の間近で淫靡な姿を晒しだす。アナルまでもが愛液で濡れた小麦色の小さな収縮を見せていた。あまりに無防備な、おしめを代える幼児のようなその格好。クリトリスがピンと上を向いて立っていた。恥ずかしすぎる。だが、それを遥かに上回る未知の期待。このまま乳首にされたみたいにあそこを激しく攪拌されたら。そう思ってみただけで、卑猥な唇は新たな涎を垂らしてしまう。

「どこが一番こっぴいますか？」

「えっ？」

「クリトリスですか？ 小陰唇？ それともこの穴ですか？」

答えを返す前に愛の長い舌先は最も恥ずかしい薄茶の皺を放射状になぞっていた。そこが気持ちのいい場所だなんて、彼女は夢にも思わなかった。最初は戸惑いで感じる余裕すらなかった快感が、数秒後にはふつつつと湧き上るよう襲ってくる。

「そんなところ、ダメ……！ でも……」

「でも？」

「ああ……止めないでえ……！」

北川はまるで窄まる口を開けようとでもするように、縦に歪んだ円のわきを両手の親指でクイと押した。排便のときには感じたことのないざわざわとした

感触が皮膚を走り、由貴はからだに鳥肌の波をたてた。すぐに舌先が中央を伸ばすように動きはじめた。内部の粘膜が少し顔を覗かせたせいだろう。そこに直に触れられる快感はさっきの快感の比ではなかった。盛大な高いあえぎにつられ、括約筋は恥ずかしいほど蠢いた。このままでは自分すら知らない内部の感触まで知られてしまう。由貴は本能的に赤茶の門を固く閉じた。しかし、そんな強ばりをやさしくほぐす彼女の愛撫は性急ではないが執拗で、それは氷を溶かす春のあたたかな陽射しのように頑なに閉じる門をいつしか完全に弛緩させた。

「あうっ……！」

内部への深い進入を許した途端、由貴のからだは乳房を弾ませ痙攣した。見ず知らずの美しき同性に出会った途端に致された、余りに破廉恥極まる背徳の

行い。反射でアナルをきつく絞めた。しかし、彼女の舌先を肛門で包んでしま
うそのリアルすぎる感覚は、受け手となって挿されたときよりずっと淫らなも
のだった。由貴はすぐに放射の穴を弛緩させた。舌先は間髪入れずに滑り込ん
だ。そして繰り返される、自分ではセーブできない反射の収縮。気が狂いそう
な快感だった。抜き差しを重ねるごとに彼女の舌は、深くえぐるように禁じら
れた粘膜を犯していく。

こんなの、いけない……。でも、ああつ、気持ちいい……！

「どうですか、こりは癒されてきましたか？」

声で返事を返すことはできなかった。しかし、振り返ったままで戻らない両
方の足の指が彼女の快感の度合いを如実なまでに語っていた。彼女のアナルは
今や完全に麻痺していた。その口は排泄をするでもないのに深く黒い穴を開け、

膣口はアナルの動きに合わせてるようにパクパクと壁を蠕動させている。

「次はここ癒しましょうね」

目の焦点の定まらぬ由貴をよそに、北川の舌先は濡れた壁を舐め上げながら、徐々にパールの輝きへと向かって行った。由貴はむっちりとした太ももをM字型に開いたまま、なす術もないまま吃音にも似たあえぎを洩らした。

こんなにクリトリスが立ったことなど一度もなかった。そこはまるで若い女の子のように力強く伸びあがり、薄皮のような包皮は今や完全に後退している。ただ息がかかるだけで針で刺されるような快感が走り抜けた。ここをしゃぶられたりしたら、わたし……。由貴は刹那に思いながらも、その先は、想像することすらできなかった。

（北川さん……！）

声にならない小さな叫びを上げた瞬間、剥き出しの神経を熱い舌先で擦られた。

（くっううう……！）

目を閉じているのに眩しかった。ただでさえ勃起していた陰核が、さらに引き出されるように吸い出された。そして続く、唇と舌先を巧みに使ったあの官能のバイブレーション。喘ぎ声すら出すことはできなかった。息を吐くこともままならなくて、横隔膜は引きつけを起こしたように痙攣した。

小夏に聞いたとおりのかわいい子。北川は激しいクンニを続けながらそう思った。彼女がこれほど直接的に初対面の女性に自分の技術を披露することなどまずありえないことだった。彼女が由貴の願い受け入れる気になったのは、あの湯船での秘め事や、由貴との出会いをうれしげに語る小夏の無邪気な笑顔が

あったから。

由貴に見せた強気で傲慢な態度とは裏腹に、小夏はひどく小心で人見知りを
する女性だった。北川は、小夏の頼みなら何でも聞いてあげたかった。願いを
叶え、喜ぶ顔を見てみたかった。彼女にとって小夏はこの世で唯一の友達、そ
してかけがえのない最愛の妹のような存在なのだ。

最初はそんな気持ちで由貴と接していた彼女だったが、今や彼女は由貴に対
してゆきずりとは思えぬぐらいの、いとおしさや親愛の情を感じていた。きっ
と小夏も彼女の透き通るような無垢で純粋な雰囲気、出会った瞬間、本能的
に心を奪われてしまったのだろう。

由貴の乱れかたはまるでメス猫のように奔放で、小犬のように従順だった。
そしてなにより、性の悦びなど感じたことなどないようなその清らかな表情に

ときたま浮ぶ、目の覚めるような恍惚の美と輝き。その天使のような表情には、北川目当てでやって来る飢えた女たちの表情とはまるで違う、人を癒す力があった。彼女を悦ばせているうちに、北川は心がどんどん軽くなっていく不思議な自分の気持ちを感じていた。由貴はまったく気づいてなんていないだろうが、彼女は確かに、特別な癒しのオーラを発散している。

開いた足の間から、白濁した愛液が止めどもなく溢れていた。すでに絶頂を迎えているのか、腹部の波打つような動きには張りつめた緊迫感が感じられる。これ以上続けたら、本当に失神してしまうかもしれない。そう思った彼女はまだ続けたい気持ちを抑えながらも、由貴のピンクの秘裂から粘液にまみれの口を離した。

「今日だけでは、こりは治らないみたいです。また次回にしましょうね」

そんな声も由貴にはまるで届かなかった。麻痺したクリトリスは愛撫が終わった今もなお快感を発信し続け、長すぎるエクスタシーに囚われた由貴の体は、ヒクつきながら弛緩した花弁を閉じることさえ忘れている。

「どうですか、終わりましたが？」

そんなタイミングを見計らうかのように部屋の入口のふすまがわずかに開いた。小夏だった。彼女はひょっこり顔を覗かしながら、内部を素早く仔猫の視線でうかがった。

第5章 そして、3人

「入っても、いいですか……？」

「ええ」

小夏は、深い呼吸を繰り返す全裸の由貴に視線を走らせ、そしてキツネのよう
に素早く部屋に入り込んだ。

「完全にイッちやっみたいですね」

小夏の目にもそれはあまりに明らかだった。過剰に愛液を流し続けたせいで
粘液はすっかり白濁し、クリトリスは赤みを若干増したまま、まだしっかり屹
立している。

「舞さんのテクだもん。こんなウブな子、十分と持たないでしょう？」

「いいえ、この子、元々すごく感じやすいみたいだから」

「やっぱりね。湯船の中でもすごい感度だったし。で、どうでした？ 気に入ってもらえました？」

「あなたの言う通りとてもかわいい子ね。わたしまで体が火照ってきちゃった」

「舞さんまで裸でいるなんて。もしかして、あそこも触ってもらったんですか？」

小夏は彼女に寄りそいながら、いたずらっぽく指を腰からさらに下へと伸ばしていった。

「あ、ダメ……。わたしも、濡れてるんだから……」

太ももの内側へと伸びる指を遮りながら、舞は色っぽいシナを作った。

「わたしも声を聞いているだけでどうにかなりそうだったのよ。だって、この子の声、廊下まで全部聞こえてきちゃうんだもん」

小夏は浴衣をハラリと落とした。胸のふくらみが露わになり、上半身ばかりか、見事な脚線まですべてが隠さず表れる。

「だめよ、小夏ちゃん、こんなところで」

「いいじゃないですか。この子だって、わたしたちの関係を知らないわけじゃないんですから」

はだけた浴衣を引きずりながら胸を寄せるその姿は、由貴に負けず劣らず美しかった。決して大きいとは言えないものの、均整のとれた形のいい胸。華奢なウエストは両手でつかめてしまえるほどに細いのに、普段テニスで鍛えているせいだろうか。その体は野を駆け回る小動物のように俊敏そうで、細身でい

ながら貧相さを思わせる様子など微塵もない。

北川の二の腕に彼女の柔らかな乳房が触れた。ビクツと北川の身が震えた。小夏との経験は何度もある彼女なのに、今はなぜかひどく緊張している自分の気持ちを隠せなかった。過剰に興奮しているせいだろうか。肌のすべてがいやに過敏になっている。

「本当だ。もうこんなに濡れてる」

ヒップの後ろ側から挿し込まれた指先が充血した小陰唇を捲りながら通り過ぎた。

「はうっ！」

思わず引きつりにも似た声が洩れた。口を素早く押えながら視線を由貴の顔に向けた。彼女は荒い呼吸を続けたまま、小夏がいることさえまだ気づいてな

いようだった。

「わたし、舞さんに随分と教えてもらったんですよ。キスだって、ほら、こんなに上手になりました」

うなじに指先を絡めながら耳元から少しずつ小さな唇が前の方へと移動してくる。熱い吐息。さすがの舞もほとんどなす術を見つけることはできなかった。唇の端からまるで忍び込むように侵入してくる少女の余りに柔かなその温もり。

「はう……」

そう吐息を洩らした時には、ぬるりとした舌の粘膜を口中に感じていた。欲情した若い女独特の甘く漂う、切ない香り。

「舞さん……。ああ、舞さん……」

小夏は彼女が息をすることさえ拒むように唇を密着させ、舌を内部で動かし

た。唾液が、どちらのものともわからぬままに、頬から首筋へと垂れていく。

幾人もの女性と交わり、特に小夏についてはことさら詳しく知っている北側なのに、今は受け身になることしかできなかった。若く弾けるような珠の肌、小鳥のような高めの体温、そんな小夏の肌に触れると、幾多の恍惚の経験すら、すべてがゼロへとリセットされる。

思えば、小夏と無数のバリエーションをこなしてきた北川も、第三者のいる場でこんな行為をしたことなど一度もなかった。それ以前に、性格的に気難しい面があり、排他的な小夏が他人に自分の本能に順応な姿を見せることなど絶対にあり得ないはずだった。彼女は由貴のことをそれほどまでに気に入ったというのだろうか。そんなことを思いながら由貴のまだ上気冷めやらない胸や肉感的な太ももを見つめていると、舞の心は混乱し、動揺にも似た心の揺らぎは

今までに感じたことのない新たな性感帯をざわつかせる。

北川の切ない声音に気づいたのか、由貴のまぶたは眠りから覚めた子供のようにつくりと開いていった。最初は目の前の光景に気を動転させたのだろう。絡み合うふたりの姿を見た瞬間、彼女は反射的に身をひるがえし、自らの下半身を咄嗟に隠した。しかし、そんな彼女も数秒と経たないうちにすべてを悟り、偽りのない澄んだ瞳をそつと遠慮がちに小夏に向けた。

「目が醒めたのね、由貴ちゃん」

彼女は北川の体を仰向けに横たわらせながら、いたずらっぽい瞳をやさしく返した。

「あなたもしてあげたいでしょう？」

「はい……」

「ダメよ、由貴ちゃん……」

そう呟いてみたものの、舞の口調にまるで否定の色は感じない。

「北川さんもあちこち、こっっているのよ。ほら見て、けっこう重症でしょう？」

由貴に向けて足を左右に押しやり、濡れた粘膜を指の先で広げていく。左右に淫唇が裂けていくネチャツとした感触が、北川の背筋を熱く走った。

年下の女性によって勃起したクリトリスの皮まで剥かれ、そんな姿を高校生にしか見えない幼げな少女に見つめられてしまう恥ずかしさ。ましてそこは、はしたない液でどんより潤み、フリルのような花びらは見るからに物欲しそうに充血した眩いピンクを晒している。

そんなに見ないで……。

心の中でそう思った。しかし由貴はじっと一点を凝視したまま、畳の上に手をつきながら徐々に顔を舞の元へと近づけている。

それは由貴にとって、はじめて見る他人の女性自身だった。お世辞ではなく素直に美しいとそう思った。どんな高級な絵具でも表現できないと思えるような、透き通るルーージュのような透明感。精巧な小陰唇は完全な左右対称で、内部の折り重なる肉の襞は女の身ですら本能的な射幸心を煽られる。

「すいません、わたしばかり癒してもらって……」

「いいんですよ。仕事なんですから」

「本当に仕事なんですか？」

由貴の体が北川の足の間にもぐり込んだ。さらに開いてしまう二本の足。

「あの、小夏さん……。教えてもらっていいですか？ わたし、初めてで何も

わからないんです」

「いいわよ。その代わり、ここで覚えたこと、わたしにもしてくれる？」

「はい、もちろんです」

「それじゃあ、ここで見ていてあげる。まずは足をもっと開いてあげてごらん」

由貴は彼女の膝の裏を手で支えるようにして抱え、その手を向こうへと押していった。こんな体勢をさせていいのか不安だったが、言われた通りに従うと、舞の性器はさらに美しく花開いた。

「ああっ、ダメ、恥ずかしい……。だって、すぐ濡れてるでしょう？」

「すぐ濡れています」

由貴は正直にそう言った。そう答えるより他に表現のしようがなかった。自

分は人より愛液が多い方じゃないのかと密かに悩んでいた由貴だったが、彼女のそこを見つめていると、そんな悩みは自分の思い過ぎだったとよくわかった。すでに透明の粘液はアナルを潤し、それでも行き場のなくなった愛液は背筋に向かって淫らな雫を作っている。

酸っぱいような甘い匂いが咽るように昇っていた。バラの花びらを思わせる薄くしなやかな小陰唇。そんな彼女の可憐なヴァギナは、他と比べるまでもなく比類なき美を誇るということを由貴は無意識に確信していた。小夏に言われなくてもそこに口づけしたかった。蜜を吸り、機敏そうに顔を覗かす真珠のような小さな突起を口に含んで愛したかった。しかし小夏は、局部を凝視される羞恥に身悶える舞の表情をうっとり見つめながら妖しく乳房を揉むだけで、何の助言も施そうとはしなかった。

「小夏さん……」

由貴は懇願するような口調で呟いた。彼女ははつとしたように我に返り、そして今や帯だけを腰骨に引っかけた格好のままその身を由貴と平行するように移動させた。

ふたりに一点を見つめられる北川の表情は、眉間に皺を寄せる、苦痛に耐え忍ぶような苦渋に満ちたものだった。だが、そんな彼女の表情は眩しいほどに美しく、下唇を噛み締めるその仕種は艶やかで妖艶だった。開ききった卑猥な粘膜と彼女の煌びやかな表情のどちらが官能的なのか分からなかった。どちらに視線を移しても、体の奥底が焦らされるように熱くなった。気がついたら、小夏の助言を聞く前に舌先を伸ばしていた。小夏は何も言わなかった。ただ、舌先を這わせやすいよう、大陰唇に添えた両手をじっと開いただけだった。

第六章　舞、エクスタシー

間近で見つめる舞の性器は少し離れて見ていたときとは違い、ガラス細工のような至極繊細なものだった。ピンクのラヴィアの造形も一見単純なようでその実計算しつくされたような複雑な曲線を持ち、特にクリトリスを頂点とする大陰唇の接合部はあまりにも有機的で、指で触れたら溶けて崩れてしまいそうな危うい調和の上で成立している。

太もものシルクのような純白さと鮮烈なピンクの対比が眩しいほどに目に映った。そして恥丘を覆う漆黒のデルタ。それはまるで思春期以前の少女のようにほんのり薄く、一本一本の毛の狭間には、陽にあたったことなど決していない青白いほどの素肌が透けて見える。

それにしても、何て本能をくすぐる芳しい香りだろう。間近でそんな立ち昇る甘い妖香を感じるだけで、からだはとろけていつてしまいそうだ。

由貴はそつと目を閉じ、ひかえめに伸ばした舌先でまずは花びらの輪郭を軽く舐めた。ピリリとするからいような刺激を一瞬感じた。だがそれはすぐに味蕾を甘くひたす熟れた果実の味となり、生ぬるい肉の感触が口いっぱいに広がるころには、その味は濃密なバニラのような熱帯を思わす官能的な味覚となった。

北川のつま先は緊張のためか快感のためか、盛んに苦しげにねじれていた。由貴ほど純情で幼げな女の子に直接局部を舐められたことなど、いかに北川とはいえ一度もないに違いない。ましてや今のような状況で濡れた秘裂を舐められたことなど断じてないことだろう。

無垢な女性を指先で導いたことは何度もある。しかし、受け手となる経験はそれに反してずっと少ないものだった。彼女を目当てに訪れる者の多くはその指先だけが目当てである。ましてや誰にでも施しをするというわけではない彼女のこと。ここを訪れ彼女に恩恵を受けた者はただそれだけで感激し、彼女を癒そうとすることまでは考えも及ばなかったし、余りに巧みな北川の卓越した技巧を受けたあとでは彼女に何かを施そうとすることなど誰も恐れ多くてできなかった。小夏のような女性は極めて稀で特殊だった。最初は弾ける肉体にただものを言わせていただけの小夏。そんな彼女も舞と交わっているうちに、今ではすっかり艶やかな大人の女に成長している。

由貴のぎこちない愛撫が続いていた。この程度の舌先で感じる北川ではないはずなのに、これほどに軌を逸した感じ方をしてしまうのはなぜだろう。

まるで無心の愛撫だった。そこには余計な飾りはなく、ただ相手を悦ばそうとするだけの純粋な誠意のみが感じられた。仔細な皺まで残さず伸ばしていこうとするような、朴とつなほど熱心なその愛撫。彼女のあえぎのトーンを機敏に聞き分け、反応のあった部分をさらに探求しようとする、心憎いほどの愛の奉仕。そんな由貴の愛撫は無骨でぎこちない動きながらも、そこには魂から官能を呼び起こそうとでもするような、手馴れた者には真似のできない澄みきった情熱の息吹を感じさせる。

「北川さん、感じているの？」

北川の普段とは違う腰つきに小夏は小さな声で問い掛けた。彼女は答えることなどできなかった。クリトリスの周りを巡っては頂点を擦るリズムカルなその動きに、彼女は今や剥き出しのアナルをヒクヒクと蠢かすことしかできない

のだ。

「由貴ちゃん、舞さん、すごく感じているよ・・・」

自分がアドバイスすることなど何もない。そう思うと小夏は少し淋しいような気がした。しかし、由貴のこんなにも愛らしい表情が自分の股間に深く埋められているところをひとたび想像してみただけで、勃ったクリトリスはキュンと痺れ、つまらぬ嫉妬心などすぐにどこかへ消えてしまう。

もうじつとしてなどいらなかった。小夏は身をよじりながら北川の乳房に手を添え、勃起しきった乳首にうっとり唇を近づけた。

（わたしだって、負けないんだから・・・）

俊敏な小動物のような彼女のからだは舞に向かって伏せられる。乳首に吸い寄せられていく、ぽっちゃりとした可憐な口許。

「うくっ、あっ、ああっ！」

固い突起をしごかれるように口に含まれ、北川は一際大きなあえぎを発した。彼女のからだを知り尽くした小夏の愛撫。それはやはり、彼女の快感の枝葉を一気に束ねるほどに鋭かった。痛みと官能の狭間の微妙なラインを巧みに操るような、その陰しくもやさしい舌使い。クリトリスを舐め回される悦楽と、乳首を吸って摘まれる嵐のような激情に、北川の体は丘に上がった魚のように前後左右に跳ねまわる。

（そこは……。あっ、あっ！ お尻の穴まで。ああっ！ そんなに！）

からだを揺さぶろうと力を込めても、今度は小夏に上半身をしっかりと押さえ込まれた。そんな小夏の行為を知ってか知らずか、由貴も彼女の下半身を動けぬように両手できつく拘束する。体力ではふたりにとてもかなわなかった。

身を波立たせることさえ許されない感極まった彼女の裸体。溢れ出るやり場のない快感が、直火で熱せられた缶のように膨張する内部の圧力を高めていく。

（熱い……。熱い……。からだが熱い……）

唯一自由に動かせる指先が、シーツをはみ出し畳に擦るような傷を刻んだ。

このままじゃ、ほんとに、本当に壊れてしまう。北川の固く閉じた口許から、あえぎの代わりにガラスを擦るような齒軋りの音が洩れた。

片方の乳首を吸われている最中にも、唾液でぬめるもう片方の乳首を指で摘まれ手のひらで転がされた。下では膣の内部の壁を指で擦られアナルの襞を舌が這う。息をすることさえ忘れていた。やっと息を吹き返したときには窒息の寸前だった。

「ち……。ちち……。！」

声にならない声とともに、膈口上部の小さな穴からレモン水がほとばしった。こんな快感、感じたことなど一度もなかった。快感に恐怖や畏怖を感じたことなど、むしろ今はじめてだった。

（わたし、ああっ、し、死んじやう……！）

北川の背筋がブリッジを作るように鋭く反った。それは反射というより硬直により近く、小夏がいくら押さえつけようとしても押さえきることなどできなかった。

首筋からつま先にまで全身に幾本かの筋が浮いた。北川は声にならない吃音を発しながら一瞬泣きそうな子供のような顔を作り、刹那のあいだその身の動きを完全に停止させた。由貴は絶頂の瞬間を逃すまいとピンク色の花びらからクリトリスまで口に含んで激しく舌先を揺さぶった。

ジューツと音をたてるような勢いで、内部からほのかに甘い液体が迸った。それは尿とも愛液ともつかないキラキラ光る虹色の飛沫だった。由貴はなぜだかひどく切ない気分になりながら口いっぱいで舞のエクスタシーの証を受け入れた。

「はっ、はあ……。くっ、はあ、はあ……」

徐々に硬直が解けながらも舞は凄まじい快感に身を貫かれたままだった。しばらく動くことなどできなかった。全身の神経は統率を失い、勝手に快感の残像を飛び散らせる。こんな快感、こんな怒涛のような快感が生身の人間を襲うことがあるなんて。北川は開かれた下半身を失禁のごとく濡らしたまま、ふたりの視線を浴びたまま荒い呼吸に胸を揺らした。

第七章 小夏

「あなた、凄いわね。北川さんをイカせちゃったよ」

そう言う小夏の口調は感心を超えた、隠し切れない驚愕さえ感じさせるものだった。次は自分の番だと思うと、めくるめく期待と同時に底知れない恐さを感じてしまう。

同性の目前で愛液ばかりか過度の興奮で黄色いものまで飛ばしてしまった北川の姿。ビシヨビシヨになったピンクの亀裂を隠すこともできないまま放心したように横たわる北川のあまりにもはしたないそんな姿を見つめていると、小夏は自分はこんな姿は晒したくはないと思う気持ちと、すでに滴るまでに濡れている火照った場所を一秒でも早く慰めて欲しいという気持ちとで、心の中は

激しいせめぎ合いをはじめてしまう。

「小夏さん……」

彼女に腰に手をまわされ、小夏は初心な少女のようにビクツと身を固くした。思わず見つめてしまう由貴の瞳。そこには、さっきまでの何も知らない子供のような戸惑う表情は見当たらなかった。そこに見たのは欲望を形にすることを覚えた女の妖艶な瞳だった。何て艶やかで色っぽい瞳だろう。そう思った時には柔かな唇が唇に触れ、舌先を内部に滑り込まれたまま仰向けにゆっくりと後ろに倒れていた。

「由貴ちゃん、だめよ……」

「そんなセリフ、小夏さんに似合わないよ……」

「わたし……」

「もう何も言わないでください。北川さんや小夏さんと出会えて、わたし、すごく幸せなんです」

唇を奪われたまま、由貴の細い指先が乳房の敏感な頂点を挟みながら弄んだ。舌先を絡めながら恥ずかしい声を吐かざるを得ないのはつらかった。しかし、どうにも抑えることはできなかった。吐息とともに直接ぬるい唾液が注ぎ込まれる。舞の愛液の残り香と、由貴の甘いフェロモンを強く感じた。この子、本当に女の子のことが好きなんだ。そう思うと体の芯が炎のように熱くなった。荒くなる呼吸と鼓動。指先が下の方へと向ってくる。そんな行為に応えようと小夏も彼女のデルタへ右手を伸ばした。しかしその指先に力はなく、思いを果す前に濡れた裂け目に直に指をあてられてしまった小夏は、結局身のすべてを由貴にゆだねることしかできなかった。

善悪の判断さえつかぬような由貴のいかにも純情そうな顔の作りと未熟な体
が、この営みを過剰に淫靡に煽っていた。豊満でいながらまだ発育途中を物語
る若い乳房。小陰唇をまさぐられるめくるめく快感の狭間で小夏な必死に由貴
の乳首をその指先に捉えながらも、主導権をどちらが握っているかはすでに明
白なことだった。

「小夏さん、ああっ……」

ふたりの唇が横へ滑るようにして離れ、由貴の口から絞り出すようなあえぎ
が洩れた。白い乳房をユサユサ揉まれ、目を瞑って唇を噛み締める由貴の表情
が美しかった。首筋に煌びやかな二本の筋が浮いている。谷間へと流れるよう
に伝う汗。なんていやらしく、そしてどこまでも可愛らしい子なんだろう……。

「感じる？　ねえ、小夏さん……」

由貴はあえぎながらも陰部を擦る指の速さを増していった。小夏の引き締まった太ももやふくらはぎがビクツ、ビクツと痙攣するように躍動する。

いつしか北川がふたりの行為を間近でうっとり見つめていた。その視線はクチュクチュと忙しく鳴く。ピンクの襪を熱く捉え、ときおり小菊のような羞恥の放射を見つめている。小夏はよく見えるよう自分で足を大きく開いた。なぜそんなポーズをあえて見せつけるようにしているのか彼女は自分でも不思議だった。だが、今は剥き出しの恥ずかしいこの姿を見て欲しくて堪らなかった。繊細なピンクの花弁は往復する由貴の指に、まるで豚肉の脂身を思わせる卑猥で淫らな感触を伝えていた。シーツまでねっとり濡らす甘い女汁。そこは熟れすぎたトマトのように情熱的で、思わず吸いつきたくなくなるような瑞々しいサーモンピンクに潤んでいる。

「ああ……。由貴ちゃん」

虚ろな瞳で切なそうな視線を向ける小夏の極まる表情を見つめた由貴は、いとおしそうな瞳でいつとき視線を合わせたあと、そのまま身を屈めるように体をゆっくり後退させた。次の展開を知っているのに、小夏はまるで嫌がろうとでもするように内股ぎみに膝を閉じた。

「あつ、あつ、だめ、あつ……」

しかし由貴は焦るでもなく足の付け根に両手を這わせ、大事な部分が最もよく見えるよう小夏の姿勢を修正させた。冷静で、とても落ち着いた仕草だった。

一度は閉じた陰唇が、再びむっとするほどの香りと熱を発散しながら花開く。両手の親指を使ってクリトリスの皮を剥いた。小夏は敏捷そうな小柄な体を大きくふたつに割ったまま、甲高くかわいい声を上げた。花びらの奥のねじれ

る内部の粘膜まですべてが露わになっていた。折り重なる肉の襞。湿った粘液から立ち昇るしっとりとした香りに、由貴はふと田舎の海風の匂いにも似た懐かしい記憶を感じた。

「小夏さん、もっといっぱい感じてね……」

うっとりと目を閉じたまま、彼女は蜜を吸いにきた蝶のように、そっと舌尖を襞に這わせた。それは、まるでただ触れているだけのような、しごく穏やかなの舌の前後の動きだった。しかし、そのやさしい愛撫から受ける快感は強烈だった。まるで性感を鷲掴みにされ、ムチで打たれているようだった。勃起しきったクリが痺れ、そこはさらに屹立しようと背を伸ばした。

「ゆ、由貴……!!」

小夏は眩い光を感じた。一瞬ひきつけを起こしたように息が止まり、股関節

は脱臼寸前のきしみを上げた。

「はぐっ、うっ、うっ、あっ……！」

充血した粘膜は吐息でさえ感じたのに、直接舌先で掬われる感触は身構えや心構えをまるで無にするあまりに鋭い快感だった。小猫がミルクを啜るような無心で容赦のない愛撫が続く。こんな舌先で剥き出しのクリトリスまでチロチロと舐められたら、どんな不感症の女でも情熱のほとばしりを散らせてしまうに違いない。

「小夏さん、とっても綺麗よ……」

由貴は素直にそう思った。常に良質の温泉で体を浸しているせい、彼女の肌はまさに珠のようにスベスベしながら潤いがあり、白い恥丘の下に裂け目も透き通るような輝くピンクに満ちていた。舐めるのに何の抵抗も感じなかった。

透明の愛液も新鮮な果汁のようで、そこには女性の体液にありがちな喉に張りつくようなくどさもない。

チュツ、チュツという敏感な若芽に対するキスが続く。そんな単純な繰り返しで、小手先の技能よりもずっと小夏の感情を高ぶらせた。小さな顔には紅がさし、汗ばむ額やうなじには、数本の後れ毛が色っぽい様子で乱れて張り付く。

（そんなに、ああ、そんなに吸わないで。わたし、もうイッちゃいそう！）

丸いヒップがプルプルと小さく小刻みに揺れていた。可憐なアナルもヒクヒク蠢き、ゼリーのような花びらも微風にそよぐ若葉のように初々しくしなやかな様子で揺れている。

春の花の雌しべのような甘酸っぱいほのかな香りがふんわり鼻孔をくすぐった。会陰にたまった甘い蜜。それは北川より若干濃く、唾液よりもほんの少し

粘りがあつた。舐めても吸っても湧き出す泉は枯れなかった。それどころか溢れる量はさらに増し、由貴は鼻先からあごの先まで女の汁で汚しながら、肉をすすする淫靡な音を時とともに高めていった。

「あつ、ああつ、ああ……！」

つま先に緊迫した筋が浮いた。愛液の粘度が増し、そこは白く泡立った。小夏の中から小刻みに震えていた。

「……イク、イツちゃう」

小声だが、切羽つまつたその声音だった。白いクリトリスがピクツと動き、そこは一瞬錯覚ではない膨張の兆しを見せた。

「由貴っ、由貴、ああ！ イクツ、イ、イツちゃうう……！」

それは活発で闊達な彼女からは想像できない静かなエクスタシーへの到達だ

った。由貴は舌と唇で盛んに若芽を摘みながら、彼女の穏やかな硬直を迎え入れた。

外では雪がしんと、音もないまま降っていた。部屋には三人の呼吸の音すら今は聞こえず、ほのかに香る女匂だけが鄙びた和室を芳しく満たしていた。

由貴は愛液に染まる唇を妖しく艶やかに光らせ、不安げな表情で北川を見つめた。すべてが夢のような、そんな気がした。北川はただ優しく微笑んでいるだけだった。何かこたえて欲しかった。しかし彼女はただ慈悲を帯びた確かな瞳でじっと少女を見つめるだけ。夢なら、醒めないで。せつに願う由貴の頬に、北川の両手がそっと伸びた。少女は震えながら瞳を閉じた。そして交わされる、

とてもか弱い、まるで初めての口づけのような淡い接吻。だが、そこには温かな体温と、幻ではない確かな唇の感触が存在した。やはりこれは夢ではない。目を開け、やっと微笑みを洩らした由貴に、北川も小さな笑みを向ける。それは今までに見たことのない、どこか物悲しげな、影を感じさせる微笑みだった。

「北川さん……」

由貴は彼女がどこか遠くへ行ってしまうような漠然とした不安をふと感じた。いやそれは、たぶん幸せすぎる今に不安を感じただけだろう。だってこんなに満ち足りた気持ち、今までの人生で感じたことなどないのだから。